

# 母親の育児意識に関する研究

— 子育て支援親子教室参加者の育児意識構造 —

幸 順子・浅野敬子\*

## Factorial Analysis of Behavioral and Emotional Presentations in Maternal Activities by a Questionnaire Survey : Responses of Mothers Participating in Parenting Support Programs

Junko YUKI and Keiko ASANO

### 1. 問 題

現代日本の社会構造の変化に伴い、都市化と家庭の社会的孤立、核家族化、少子化は進行し、家庭における育児機能の低下や育児不安・子育て困難が指摘され、育児支援の必要性が主張されている。

柏木(2008)<sup>1)</sup>は、「子どもをつくる」という価値観の時代において、今や、「豊かな大人の生活」と引き換えに「子どもの価値」が相対化し、女性のライフスタイルにおける子育ての価値も他の社会的役割の価値との間で相対化したことを指摘している。その結果、「育児だけ」を選択することへの満足感が得られにくくなり、「育児だけ」のライフスタイルへの不安感を生じさせることとなった。さらに、こうしたライフスタイルの中で、少なく産んで良く育てる「少子良育戦略」が子どもの育ちへのこだわりやプレッシャーを生み出し、子どもにとって圧力となるとともに、親の側に子育て困難の感覚を生じさせる一因ともなっている。柏木は、そうした現代の子育て事情をふまえ、子育ての社会化に積極的に価値をおいた子育て支援が必要とされていることを主張している<sup>1)</sup>。

小出(1999)<sup>2)</sup>、伊志嶺・小出・柴田(2001)<sup>3)</sup>は、人権尊重と相互扶助の意識に根ざしたカナダにおける子育て支援に注目し、その実態を明らかにしている。日本とカナダの子育て意識の違いについて乳幼児を養育中の親(主に母親)を対象に比較調査研究を行い、日本と比較してカナダでは「子育ては楽しい」と思える親が圧倒的に多いことを明らかにした<sup>2)</sup>。小川によると、調査の際、「子どものことでイライラするか?」などの質問を試みたところ、「そもそもなぜそのような質問が出てくるのか」といぶかる人がカナダでは多く、質問項目を説明し直さなければならなかったという。また、結果として「子どものことでいつもイライラする」という回答は、カナダでは1.7%であったのに対し、日本は10.7%であることを示し( $p<.05$ )、都市化・少子化が進行し、日本のような公立保育所が整わない状況でありながら、子育て意識にこのような大きな差異が生じるのは、日常的に「孤独な子育て」に陥らないための支え合いの子育ての風土が存在するためであることを指摘している。

医療・保健分野における現代の母親の育児不安や育児困難と育児支援に関する研究として、

---

\* 中京女子大学人文学部

川井・庄司・千賀ほか (1999)<sup>4)</sup> は、育児困難感とその要因を明らかにし、臨床的援助へ適用することを目的として、0～6歳までの子どもの母親(乳幼児健診、小児科外来、保育所、幼稚園)を対象に、子どもの問題や父母の心の状態に関する否定的側面に注目して質問紙調査を行った。因子分析の結果、各年齢群に共通して、①「夫(父親)や家庭機能の問題」、②「子どもの問題」、③「夫の心身の問題」、④「育児困難感」、⑤「母親の心理的問題」などの因子を抽出し、「育児困難感」と「母親の心理的問題」の関わりを指摘している。

また、木村・西内・平野(小野)・高田(2006)<sup>5)</sup> は、育児意識に関する肯定的・否定的側面に注目し、育児意識を構成する概念を類型・尺度化し、支援に適用することを目的として、1歳6ヶ月～2歳の幼児初期の子どもを持つ母親を対象に質問紙調査を行った。その結果、①「育児の喜び」、②「育児ストレス」、③「夫(父親)のサポート」、④「育児に対する自信」、⑤「子どもから必要とされている感覚」などの因子を抽出し、「夫(父親)のサポート」が育児意識を構成する重要な要素の一つであることを明らかにするとともに、因子に関連する家族属性について分析し、核家族よりも拡大家族の方が育児ストレスが低いことを明らかにした。

一方、「母親の就労支援」や「少子化対策」などの問題を背景にして、乳幼児の母親のライフスタイルと育児意識の関わりに注目した研究として、菅野・田矢・柏木(2003)<sup>6)</sup> は、夫(父親)のサポートや夫婦関係の問題以外に、妻(母親)の就業形態やライフパターンに注目し、育児意識の分析を行い、妻(母親)のフルタイム労働や自己実現の感覚、夫婦の調和が、妻(母親)の子育てに対する肯定的な意識と関係あることを明らかにした。また、八重樫・小河(2002)<sup>7)</sup>、小坂(2004)<sup>8)</sup> も育児意識と母親の就労形態との関連性について分析し、フルタイム労働の母親よりも専業主婦に親役割満足が低く育児不安が高い傾向があることを指摘している。

櫻谷(2003)<sup>9)</sup> は育児期の母親の生活や育児に関する現状を把握・分析し、今後の子育て支援の課題を明らかにすることを目的として、乳幼児の母親を対象に育児意識と育児の実態に関する調査を行っている。ここでは、今日的な問題として、子どもや子育てへの経験的理解のなさや育児不安や困難、不適切養育との関連性が指摘され、夫の育児参加への不十分さや、女性のライフスタイルの変化に伴う女性の就労および子育てをめぐる葛藤と就労支援の不十分さなどの実態が明らかにされている。

このように、育児支援策については、家庭の養育者の意識、置かれた状況や抱える問題、社会状況とのかかわりのあり方など、育児不安や困難を生み出す要因を明確化し、ニーズに応じた支援策が立案される必要がある。このことをふまえ、浅野・高橋・時安(2006)<sup>10)</sup>、浅野・百澤・山本・高橋・時安(2008)<sup>11)</sup> は、育児意識を、育児情報や父親以外の人間関係などより広範な社会的関係の中でとらえることとし、育児状況に関わる項目36項目を用いて保育所・幼稚園児の母親を対象とした質問紙調査を行った。いわゆる仕事を持つ母親と専業主婦の育児意識に関する因子構造を検討したところ、①育児拒否、②育児情報不足感、③夫との協力、④安定的育児協力の確保(育児状況への安心感)などの因子が共通して抽出された。また、保育所児の母親は、保育所において提供されている支援が日常化し、自覚されないのに対して、幼稚園児の母親においては、上記の因子に加えて「社会的育児支援利用」の因子が抽出され、幼稚園教育の補完的役割として、他の育児支援資源に関心が寄せられる場合があることが示唆された。

## 2. 目的

今回、浅野・高橋・時安(2006)<sup>10)</sup>、浅野・百澤・山本・高橋・時安(2008)<sup>11)</sup>の研究をふまえ、さらに調査対象を広げて、より一般的な母親の育児意識について把握するために、子育て支援の親子教室に参加した乳幼児の母親を対象に、浅野ほか(2006、2008)<sup>10) 11)</sup>と同一の質問紙を用い、調査を行った。本研究では、その育児意識構造を分析し、特徴を検討することを目的とする。

## 3. 方法

### 質問紙

浅野ほか(2006)<sup>10)</sup>にて使用した質問項目と自由記述部分を対象者に合わせて一部改変したものをを用いた。質問紙作成については浅野ほか(2006)<sup>10)</sup>に提示されており、今回使用した質問紙は本論文の末尾に掲げた。なお、質問項目の改変は、部分的な表現上の改変であり、浅野ほか(2006、2008)<sup>10) 11)</sup>の結果との比較検討を行うにあたって差し障りのない程度の変更である。

### 調査対象

基礎資料：愛知県内K市(2008年人口約30万)の公立児童館(児童館型子育て支援センター)における0～1歳児および2～3歳児の親子教室に参加した養育者187名を対象に実施し、182名の回答を得た(回収率97%)。ここでは、このうち、回答者が母親であり、回答への大きな欠損値のない171名の回答のみを分析の対象とした。

### 調査の実施方法

子育て支援の場における、0～1歳児および2～3歳児の親子教室に参加した養育者に直接配布し、教室終了時にその場で記入をもとめ回収した。回答は無記名で求めた。

### 調査時期

2008年9月

## 4. 結果

### (1) 固有値の減衰状況

調査用紙の第一部については回答を点数化して、36項目への回答を縮約するために因子分析(主成分分析)を行った。固有値の減衰状況を表1および図1に示す。成分の第2番目と3番目の間、第6番目と7番目の間に比較的大きな差があったため、因子数2、3、4、5、6までを採用して、それぞれバリマックス回転(Kaiserの正規化を伴うバリマックス法)をほどこした。その結果を内容的に検討して、因子数2および因子数6を採用した。

表1 固有感の減衰状況

成分	固有感
1	4.59
2	4.13
3	2.25
4	1.98
5	1.87
6	1.74
7	1.38
8	1.32
9	1.18
10	1.13
11	1.07

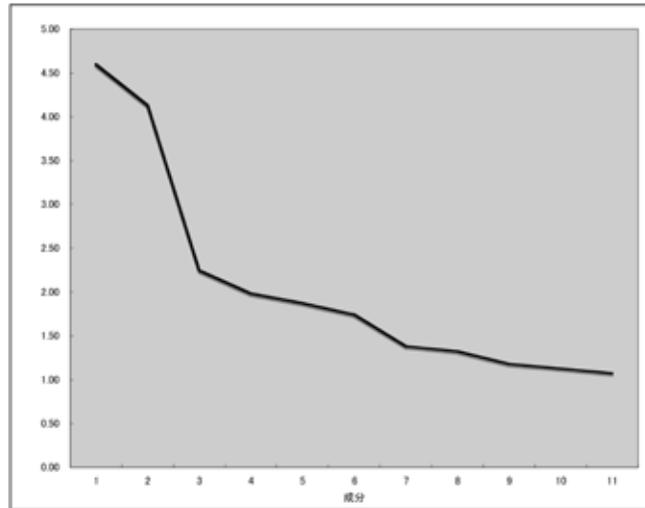


図1 固有感の減衰状況

表2 子育て支援利用の母親の育児意識構造：6因子の場合のバリマックス回転後の因子負荷量

項目		1	2	3	4	5	6
子どもに対する否定的感情・行動傾向	7. 時々、子どもに口やかましく小言を言ってしまう	72	14	-9	-8	-2	-22
	6. 気に入らないことがあるとたまに子どもにあたりちらす	70	-1	-16	-10	-9	-26
	4. 時々、子どもの欠点ばかり目についたり気になったりする	66	15	-6	-5	4	-22
	12. 子どもをしかる時、たまに打つとかつねるなどの体罰をしてしまう	62	9	-13	-13	2	-4
	3. 時々、子どもの要求や約束を忘れたり無関心だったりする	59	-4	0	13	-6	8
	1. 忙しいとたまに子どもに取り合わないことがある	54	8	25	9	0	12
	2. 子どもがどんな遊びをしていても放っておくことがある	51	-5	9	2	5	11
	11. 時々、子どもへのほめ方、しかり方がわからない	51	-3	-18	40	9	22
	31. 子どもが一人でできることで、つい手をだしてしまう	38	-5	-7	31	-3	19
	5. 時々、これはダメなどと子どものすることを禁止する	33	12	28	-3	-19	12
9. 子どもと過ごす時間が少ない	32	-5	-5	0	12	0	
社会的育児支援資源の利用	24. 時々、子育ての情報を得る機会がある	-3	75	7	-13	4	16
	23. 子どもと安心して遊べる場所がある	6	69	-1	-5	-6	16
	17. いつも悩みを相談する相手がいる	5	62	13	-10	13	27
	34. 他の母親との交流がある	-1	58	28	-18	-3	6
	25. 子育て支援などに参加したことがある	6	58	12	7	8	-24
	26. 時には子育て支援などに参加してみたい	6	56	16	15	3	-19
	18. 自分自身のストレス解消法を持っている	0	39	2	-26	34	24
22. 時々、専門家から子育ての話を聞く機会がある	-13	31	15	1	25	-18	
夫婦間の協力関係維持	36. 夫に何でも悩みを相談する	4	29	84	-7	2	5
	35. 夫と子どもの話をよくする	7	42	77	-2	-8	5
	33. 夫婦で家事・育児を協力しあっている	-9	5	71	-5	8	-4
育児知識・技能についての不足感	21. 育児に対して夫の理解がない	18	-1	-69	12	-9	3
	13. 排泄の仕方をどのように教えたらいいいのかわからない	-10	-5	-1	59	2	7
	14. 時々、カゼなど病気をした時にどうしたらいいのかわからない	-12	-11	-6	58	8	4
	10. 時々、子どもとの接し方がわからない	36	-15	-11	54	3	-8
子どもからの自由	28. 思っていた子育てと実際の子育てとは違う	8	29	-10	52	-24	-24
	20. 育児を休みたい時には子どもを預かってくれる人がある	0	30	-8	-6	79	4
	19. たまに用事のある時には子どもを預かってくれる人がある	6	41	-2	3	71	11
	27. なかなか一人の時間が持てない	2	26	-5	31	-47	-2
	8. 外出時、たまに子どもに留守番をさせたり他家へ預けたりする	20	-2	6	22	41	-28
子どもとの一体感	30. 毎日、育児日記をつけている	-22	-20	9	32	38	13
	32. 子どもの実年齢よりも赤ん坊のように接することがある	26	-8	13	22	35	0
	15. 子どものためならどんな犠牲をはらっても満足してられる	9	5	-1	3	2	71
	16. 子どもが家にいないと淋しい	-6	33	1	18	1	63
29. 時々、子育てにプレッシャーを感じる	23	19	-17	40	-10	-48	

\*因子負荷量の数値は小数点以下2桁のみ(2桁未満四捨五入)を示し、30以上を色づけした。

## (2) 6因子を採用した場合

因子数6までで、説明される分散は46.0%である。回転後の各因子によって説明される分散は第1因子10.6%、第2因子10.1%、第3因子7.7%、第4因子6.2%、第5因子6.0%、第6因子5.3%である。因子負荷量0.30までをめやすに、各因子について、因子付加量の大きな項目を示した(表2)。

まず、第1因子では、項目7. 時々、子どもに口やかましく小言を言うてしまう(因子負荷量0.72)、6. 気に入くないことがあるとたまに子どもにあたりちらす(因子負荷量0.70)、4. 時々、子どもの欠点ばかり目についたり気になったりする(因子負荷量0.66)、12. 子どもをしかる時、たまに打つとかつねるなどの体罰をしてしまう(因子負荷量0.62)、3. 時々、子どもの要求や約束を忘れてたり無関心だったりする(因子負荷量0.59)、1. 忙しいとたまに子どもに取り合わないことがある(因子負荷量0.54)、2. 子どもがどんな遊びをしていても放っておくことがある(因子負荷量0.51)、11. 時々、子どもへのほめ方、しかり方がわからない(因子負荷量0.51)などで因子負荷量の値が高く、「子どもに対する否定的な感情・行動傾向」を示している。

つぎに、第2因子では、24. 時々、子育ての情報を得る機会がある(因子負荷量0.75)、23. 子どもと安心して遊べる場所がある(因子負荷量0.69)、17. いつも悩みを相談する相手がいる(因子負荷量0.62)、34. 他の母親との交流がある(因子負荷量0.58)、25. 子育て支援などに参加したことがある(因子負荷量0.58)、26. 時には子育て支援などに参加してみたい(因子負荷量0.56)、36. 夫に何でも悩みを相談する(因子負荷量0.42)、19. たまに用事のある時には子どもを預かってくれる人がある(因子負荷量0.41)などで因子負荷量の値が高く、(夫や身近な支援も含めた)「社会的育児支援資源の利用」を示す次元であると考えられる。

第3因子では、36. 夫に何でも悩みを相談する(因子負荷量0.84)、35. 夫と子どもの話をよくする(因子負荷量0.77)、33. 夫婦で家事・育児を協力しあっている(因子負荷量0.71)、21. 育児に対して夫の理解がない(因子負荷量-0.69)などで因子負荷量の値が高く、「夫婦間の協力関係維持」を示している。

第4因子では、13. 排泄の仕方をどのように教えたらいいのかわからない(因子負荷量0.59)、14. 時々、カゼなど病気をした時にどうしたらいいのかわからない(因子負荷量0.58)、10. 時々、子どもとの接し方がわからない(因子負荷量0.54)、28. 思っていた子育てと実際の子育てとは違う(因子負荷量0.52)、11. 時々、子どもへのほめ方、しかり方がわからない(因子負荷量0.40)、29. 時々、子育てにプレッシャーを感じる(因子負荷量0.40)などで因子負荷量の値が高く、「育児知識・技能についての不足感」を示していると考えられる。

第5因子では、20. 育児を休みたい時には子どもを預かってくれる人がある(因子負荷量0.79)、19. たまに用事のある時には子どもを預かってくれる人がある(因子負荷量0.71)、27. なかなか一人の時間が持てない(因子負荷量-0.47) 8. 外出時、たまに子どもに留守番をさせたり他家へ預けたりする(因子負荷量0.41)などで因子負荷量の値が高く、「子どもからの自由」を示す次元であると考えられる。

第6因子では、15. 子どものためならどんな犠牲をはらっても満足していただける(因子負荷量0.71)、16. 子どもが家にいないと淋しい(因子負荷量0.63)、29. 時々、子育てにプレッシャーを感じる(因子負荷量-0.48)、などで因子負荷量の値が高く、「子どもとの一体感」を示す次元であると考えられる。

## (3) 2因子を採用した場合

つぎに、2因子までを採用して回転を施した場合の結果を示す。因子数2まででは全分散の24.2%が説明された。回転後の各因子によって説明される分散は第1因子12.8%、第2因子11.5%である。回転後の因子負荷量を表3に示す。

表3 子育て支援利用の母親の育児意識構造：2因子の場合のバリマックス回転後の因子負荷量

		項目	1	2
育児に関する 全般的な安 定感	35.	夫と子どもの話をよくする	73	-1
	36.	夫に何でも悩みを相談する	70	-8
	24.	時々、子育ての情報を得る機会がある	69	4
	17.	いつも悩みを相談する相手がいる	64	8
	34.	他の母親との交流がある	64	-1
	23.	子どもと安心して遊べる場所がある	56	15
	25.	子育て支援などに参加したことがある	49	18
	26.	時には子育て支援などに参加してみたい	47	20
	18.	自分自身のストレス解消法を持っている	47	-3
	19.	たまに用事のある時には子どもを預かってくれる人がある	47	13
	33.	夫婦で家事・育児を協力しあっている	43	-21
	21.	育児に対して夫の理解がない	-40	31
	20.	育児を休みたい時には子どもを預かってくれる人がある	38	5
	16.	子どもが家にいないと淋しい	34	-3
	育児困難の 感覚	22.	時々、専門家から子育ての話聞く機会がある	34
14.		時々、カゼなど病気をした時にどうしたらいいのかわからない	-21	3
15.		子どものためならどんな犠牲をはらっても満足してられる	15	1
13.		排泄の仕方をどのように教えたらいいいのかわからない	-14	5
7.		時々、子どもに口やかましく小言を言うてしまう	6	71
6.		気に入らないことがあるとたまに子どもにあたりちらす	-12	68
4.		時々、子どもの欠点ばかり目についたり気になったりする	8	66
12.		子どもをしかる時、たまに打つとかつねるなどの体罰をしてしまう	4	58
11.		時々、子どもへのほめ方、しかり方がわからない	-13	58
3.		時々、子どもの要求や約束を忘れたり無関心だったりする	-4	56
1.		忙しいとたまに子どもに取り合わないことがある	21	48
10.		時々、子どもとの接し方がわからない	-28	48
29.		時々、子育てにプレッシャーを感じる	-11	44
2.		子どもがどんな遊びをしていても放っておくことがある	4	44
31.		子どもが一人でできることでも、つい手をだしてしまう	-10	41
28.		思っていた子育てと実際の子育てとは違う	-1	31
9.		子どもと過ごす時間が少ない	-3	29
8.		外出時、たまに子どもに留守番をさせたり他家へ預けたりする	2	27
32.		子どもの実年齢よりも赤ん坊のように接することがある	4	26
5.		時々、これはダメなどと子どものすることを禁止する	23	26
30.	毎日、育児日記をつけている	-7	-19	
27.	なかなか一人の時間が持てない	2	16	

\*因子負荷量の数値は小数点以下2桁のみ(2桁未満四捨五入)を示し、30以上を色づけした。

まず、第1因子では、35. 夫と子どもの話をよくする(因子負荷量0.73)、36. 夫に何でも悩みを相談する(因子負荷量0.70)、24. 時々、子育ての情報を得る機会がある(因子負荷量0.69)、17. いつも悩みを相談する相手がいる(因子負荷量0.64)、34. 他の母親との交流がある(因子負荷量0.64)、23. 子どもと安心して遊べる場所がある(因子負荷量0.56)、25. 子育て支援などに参加したことがある(因子負荷量0.49)、26. 時には子育て支援などに参加してみたい(因子負荷量0.47)、18. 自分自身のストレス解消法を持っている(因子負荷量0.47)、19. た

まに用事のある時には子どもを預かってくれる人がいる（因子負荷量0.47）、33. 夫婦で家事・育児を協力しあっている（因子負荷量0.43）、21. 育児に対して夫の理解がない（因子負荷量-0.40）などで因子負荷量の値が高く、「育児に関する全般的安定感」を示す次元であると考えられる。

第2因子では、7. 時々、子どもに口やかましく小言を言うってしまう（因子負荷量0.71）、6. 気に入くないことがあるとたまに子どもにあたりちらす（因子負荷量0.68）、4. 時々、子どもの欠点ばかり目についたり気になったりする（因子負荷量0.66）、12. 子どもをしかる時、たまに打つとかつねるなどの体罰をしてしまう（因子負荷量0.58）、11. 時々、子どもへのほめ方、しかり方がわからない（因子負荷量0.58）、3. 時々、子どもの要求や約束を忘れて無関心だったりする（因子負荷量0.56）、1. 忙しいとたまに子どもに取り合わないことがある（因子負荷量0.48）、10. 時々、子どもとの接し方がわからない（因子負荷量0.48）、29. 時々、子育てにプレッシャーを感じる（因子負荷量0.44）、2. 子どもがどんな遊びをしても放っておくことがある（因子負荷量0.44）、31. 子どもが一人でできることでも、つい手をだしてしまう（因子負荷量0.41）などで因子負荷量の値が高く、「育児困難の感覚」を示す次元であると考えられる。

## 5. 考 察

### （1）子育て支援親子教室利用の0～3歳児の母親の育児意識構造の特性

まず、6因子を採用した場合について見てみると、第3因子「夫婦間の協力関係維持」と第5因子「子どもからの自由」で高い因子負荷量の値を示す項目の中に、第2因子「社会的育児支援資源の利用」においても高い因子負荷量の値を示す項目があることが分かる。また、第1因子「子どもに対する否定的な感情・行動傾向」で高い因子負荷量を示している項目の中に第4因子「育児知識・技能についての不足感」においても高い因子負荷量の値を示しているものがあることが分かった。

つぎに、2因子を採用した場合について見ると、第1因子「育児に関する全般的安定感」で負の因子負荷量の高い項目21.「育児に対して夫の理解がない」(因子負荷量-0.40)は第2因子「育児困難の感覚」で高い因子負荷量（0.31）を示しており、「夫の理解のなさ」と「育児困難感」の関わりの可能性が示唆された。

さらに、6因子を採用した場合のそれぞれの因子の項目と、2因子を採用した場合の各因子の項目を対応させてみると、2因子採用の場合の第1因子「育児に関する全般的安定感」には、6因子採用の場合の第2因子「社会的育児支援資源の利用」、第3因子「夫婦間の協力関係維持」、第5因子「子どもからの自由」が対応していることがわかる。また、2因子採用の場合の第2因子「育児困難の感覚」には、6因子採用の場合の第1因子「子どもに対する否定的な感情・行動傾向」、第4因子「育児知識・技能についての不足感」が対応していることが明らかになった。

以上の結果をまとめると、子育て支援の親子教室利用の0～3歳児の母親においては、「育児に関する全般的安定感」は、「社会的育児支援資源の利用」や「夫婦間の協力」、「子どもからの自由」など、いわば開かれた社会関係のあり方と対応していると考えられる。一方、母親の「育児困難の感覚」は「育児知識から疎外された感覚」（子育ての知的理解の側面）や「子

どもの状況に対する柔軟性のない対応（心理的・物理的に距離を置いて対応することのできない様子、子育ての情緒的理解の側面）」に結びついていると考えられる。さらに、夫の理解のなさや育児困難感の関わりの可能性も否定できない。

## (2) 保育所児・幼稚園児の母親の育児意識構造との比較

浅野・高橋・時安(2006)<sup>10)</sup>は、保育所児の母親の育児意識構造を分析し、その結果、①「育児拒否」、②「育児情報不足感」、③「夫との協力関係」、④「育児状況への安心感」の4因子から構成されていることを明らかにした。また、浅野・百澤・山本ほか(2008)<sup>11)</sup>では、幼稚園児の母親の育児意識構造を分析し、その結果、4因子を採用した場合、①「育児拒否」、②「安定的育児協力の確保」、③「夫との協力関係」、④「社会的育児支援利用」を示す因子から構成されていることを明らかにし、さらに、5因子を採用した場合は①「育児拒否」、②「育児情報不足感」、③「夫との協力関係」、④「社会的育児支援利用」、⑤「安定的育児協力の確保」を示す因子から構成されていることを明らかにした。

この点について、本研究の結果と比較すると、子育て支援利用の母親の6因子の場合の①「子どもに対する否定的な感情・行動傾向」、②「社会的育児支援資源の利用」、③「夫婦間の協力関係維持」、④「育児知識・技能についての不足感」、⑤「子どもからの自由」は、それぞれ順に、幼稚園児の母親の5因子を採用した場合の①「育児拒否」、④「社会的育児支援利用」、③「夫との協力関係」、②「育児情報不足感」、⑤「安定的育児協力の確保」、との間に共通性がみられた。浅野・百澤・山本ほか(2008)<sup>11)</sup>では、保育所児と幼稚園児の母親の違いに関して、「公的育児支援の利用・関心は、保育所に子どもを預けている母親は、保育所において提供されている支援が日常化し、自覚されないのに対して、幼稚園に通わせている母親は、幼稚園教育の補完的役割として、他の育児支援資源に関心が寄せられる場合がある」可能性について指摘したが、今回の調査においても幼稚園児を対象とした調査と同様に、育児支援資源に関心が寄せられる傾向が見られた。

また、幼稚園児ではさほど意識されていなかった⑥「子どもとの一体感」が、本研究の子育て支援利用の母親の場合にはより意識されていた。これは子どもの年齢や、養育状況と関係がある可能性がある。

本研究で対象になった母親の場合、子どもの年齢が0～3才であり、日中の子育て支援を利用していることから、おそらくほとんどの母親が、家庭保育を行っていると考えられるが、こうした養育状況の母親の場合、家族(夫)も含めた支援の社会的関係が存在することが、安定的な育児へと対応し、育児困難感は子どもや子育てに関する理解不足や、育児に対する夫の理解のなさや対応している可能性がある。

言い換えれば、子育てや子ども理解に関する情報を提供することや、夫の理解を促進するような支援が、育児困難感を改善し、安定的子育てにつながる可能性があることが示唆される。つまり、それらを子育て支援策に反映させることが効果的であることを示唆する。また、本研究で抽出された⑥「子どもとの一体感」(「子育てへのプレッシャー」の項目を含む)の因子が、他の因子とどのような関わりを持つか検討していくことも支援策を考える上で興味深い。

以上のように、ここでは、保育所児、幼稚園児の母親と比較して、子育て支援利用の母親の育児意識がどのような構造を持っているかを検討した。母親のおかれた状況によって育児意識の構造は異なっていると考えられる。今後は、因子得点の水準で保育所・幼稚園の場合との差異、諸因子間の関係などを明らかにして、育児意識構造の違いをより明確にできるような分析

を行い、育児意識の諸側面を整理して理解した上で、ニーズに応じた育児支援プログラムを探ること、つまり母親および家族のおかれ状況に対応した支援のあり方を計画していくことが課題となるであろう。

## 6. 要 約

子育て支援の親子教室利用の母親171名を対象とし、育児意識に関する36項目の質問紙への回答を因子分析した。その結果、6因子を採用した場合には、「子どもに対する否定的な感情・行動傾向」、「社会的育児支援資源の利用」、「夫婦間の協力関係維持」、「育児知識・技能についての不足感」、「子どもからの自由」、「子どもとの一体感」を示す因子が抽出された。また、2因子を採用した場合には、「育児に関する全般的安定感」、「育児困難の感覚」を示す因子が抽出された。2因子を採用した場合の第1因子「育児に関する全般的安定感」に、6因子を採用した場合の第2因子「社会的育児支援資源の利用」、第3因子「夫婦間の協力関係維持」、第5因子「子どもからの自由」が対応し、2因子を採用した場合の第2因子「育児困難の感覚」に、6因子を採用した場合の第1因子「子どもに対する否定的な感情・行動傾向」、第4因子「育児知識・技能についての不足感」が対応していた。「育児に関する全般的安定感」は、「社会的育児支援資源の利用」や「夫婦間の協力」、「子どもからの自由」など、いわば開かれた社会関係のあり方と対応していると考えられる。一方、母親の「育児困難の感覚」は「育児知識から疎外された感覚」（子育ての知的理解の側面）や「子どもの状況に対する柔軟性のない対応（心理的・物理的に距離を置いて対応することにできない様子、子育ての情緒的理解の側面）」に結びついていると考えられる。さらに、夫の理解のなさや育児困難感の関わりの可能性も否定できない。

これらの因子を浅野ほか(2006, 2008)<sup>10) 11)</sup>の保育所児と幼稚園児の母親の結果と比較した。

## Abstract

We analyzed the responses of 171 mothers to a 36 item questionnaire presenting either 6 or 2 factors. The 6 factors were: 1) "emotional stress on nursing children", 2) "official support for nursing activity", 3) "support from the husband", 4) "informational and technological defects on nursing children", 5) "release from children", and 6) "identification with children". The 2 factors were: 1) "constancy in nursing" and 2) "difficulty in nursing". These factors were compared with those in the previous studies on mothers of nursery and kinder-garden children (ASANO et al. 2006, 2008)

## 7. 謝 辞

調査にご協力下さった春日井市子育て子育て総合支援館（かすがいげんきっこセンター）関係者の皆様に心より感謝します。

## 8. 文 献

- 1) 柏木恵子, 子どもが育つ条件-家族心理学から考える. pp.38-102, 岩波新書, (2008)
- 2) 小出まみ, 地域から生まれる支え合いの子育て. pp.19-30, ひとなる書房, (1999)
- 3) 伊志嶺美津子・小出まみ・柴田明子, 人権尊重と相互扶助の市民意識に根ざしたカナダの子育て支援システムの研究: 地域住民の主体性に依拠した子育て家庭支援策の構築に向けて. 資料, pp.1-4, 子ども家庭リソースセンター, (2001)
- 4) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・谷口和加子・恒次欽也・安藤朗子, 育児不安に関する臨床的研究V-育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成-. 日本総合愛育研究所紀要35, pp.109-143, (1999)
- 5) 木村一絵・西内恭子・平野(小原)裕子・高田ゆり子, 母親の育児意識を構成する概念とそれに関連する要因. 九州大学医学部保健学科紀要, 第7号, pp.69-76, (2006)
- 6) 菅野幸恵・田矢幸江・柏木恵子, 父母の子育てへの感情はどのように異なるか-子ども・子育てに対する感情への規定院の検討-. 発達研究, 第17巻, pp.39-52, (2003)
- 7) 八重樫牧子・小河孝則, 母親の子育て不安と母親の就労形態との関連性に関する研究. 川崎医療福祉学会誌Vol.12, No.2, pp.219-239, (2002)
- 8) 小坂千秋, 幼児を持つ母親の親役割満足感を規定する要因-就労形態からの検討-. 発達研究, 第18巻, pp.73-87 (2004)
- 9) 櫻谷真理子, 今日の子育て不安・子育て支援を考える~乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通じて. 立命館人間科学研究, 第7号, pp.75-86, (2003)
- 10) 浅野敬子・高橋正教・時安和之, 母親の育児意識に関する研究: 保育園に子どもを預ける母親の育児意識構造. 中京女子大学研究紀要40, pp.49-58, (2006)
- 11) 浅野敬子・百瀬真美・山本裕子・高橋正教・時安和之, 母親の育児意識に関する研究: 幼稚園に子どもを預ける母親の育児意識構造. 中京女子大学研究紀要42, pp.115-123, (2008)

付表 調査用紙の構成

育児に関する調査（お願い）

この調査は保護者の皆様が育児を通して日頃、感じておられることや心配に思っておられることについてお聞きするものです。どの質問にも正解や良い答えはありませんので、記入上の注意をよく読んでお答えください。ここで得られた結果は研究以外の目的で使用することはありませんし、個人的に迷惑をおかけすることはないと存じます。どうかよろしくご協力ください。

I. 下記の欄に、所定の事項をご記入ください。（いずれかに○をつけてください）

1. アンケートをされた方（ 母親 父親 その他 ）
2. お住まいの市 [ 春日井市 その他（ ） ]
3. 本日、ご参加のお子様についてお答えください（ 第1子 第2子 第3子 その他（ ） ）  
 （ 年齢 歳 か月 性別（ 男 女 ） ）

II. 以下の質問に1～5のうち最も当てはまる番号へ○ をつけてください。

1. 全く当てはまらない      2. どちらかといえば当てはまらない      3. どちらとも言えない
4. どちらかといえば当てはまる      5. とてもよく当てはまる

1. 忙しいとたまに子どもに取り合わないことがある・・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
2. 子どもがどんな遊びをしていても放っておくことがある・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
3. 時々、子どもの要求や約束を忘れてたり無関心だったりする・・・・・・・・	1・2・3・4・5
4. 時々、子どもの欠点ばかり目についたり気になったりする・・・・・・・・	1・2・3・4・5
5. 時々、これはダメなどと子どものすることを禁止する・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
6. 気に入らないことがあるとたまに子どもにあたりちらす・・・・・・・・	1・2・3・4・5
7. 時々、子どもに口やかましく小言を言うてしまう・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
8. 外出時、たまに子どもに留守番をさせたり他家へ預けたりする・・・・	1・2・3・4・5
9. 子どもと過ごす時間が少ない・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
10. 時々、子どもとの接し方がわからない・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
11. 時々、子どもへのほめ方、しかり方がわからない・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
12. 子どもをしかる時、たまに打つとかつねるなどの体罰をしてしまう・・	1・2・3・4・5
13. 排泄の仕方をどのように教えたらいいのかわからない・・・・・・・・	1・2・3・4・5
14. 時々、カゼなど病気をした時にどうしたらいいのかわからない・・	1・2・3・4・5
15. 子どものためならどんな犠牲をはらっても満足していただける・・	1・2・3・4・5
16. 子どもが家にいないと淋しい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
17. いつも悩みを相談する相手がいる・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
18. 自分自身のストレス解消法を持っている・・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
19. たまに用事のある時には子どもを預かってくれる人がいる・・・・	1・2・3・4・5
20. 育児を休みたい時には子どもを預かってくれる人がいる・・・・	1・2・3・4・5
21. 育児に対して夫の理解がない・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5
22. 時々、専門家から子育ての話を聞く機会がある・・・・・・・・・・	1・2・3・4・5

